知的障害者のグループホームに関する研究 その3

—東京都内4地区のグループホームのケーススタディー—

STUDY ON GROUP HOME FOR MENTALLY RETARDED PERSONS PART 3

—A case study on group home in four regions of Tokyo—

川岸 梅和*, 伊藤 咲希子**, 川上 浩史***, 龍井 慎一郎****, 新川 宏人*****

Umekazu KAWAGISHI, Sakiko ITO, Hirohumi KAWAKAMI,
Shin-ichiro TATSUI and Hiroto SHINKAWA

This essay is the third chapter of the "STUDY ON GROUP HOME FOR MENTALLY RETARDED PERSONS". It is focused on the analysis of the living of the residents in two regions in Tokyo (Joto and Johoku area), which is added to the areas previously researched.

This will be divided into three main parts; firstly, to classify "Group Home" into categories of a residential form, a plane formation, and a layout consisting of a living room, dining room and kitchen (LDK), secondly, to discuss how floor space per person and their lives and leisure hour are related with the evaluation of a residential environment of the living, thirdly, to clarify the characteristics of the "Group Home".

On the basis of those points, it would be specified the conditions of "Group Home" and its problems by considering of the existence of the living, evaluation of a residential environment, and their activity.

Keywords : *Mentally retarded persons, Group home, Independence, Normalization, Living space*

知的障害者, グループホーム, 自立, ノーマライゼーション, 生活空間

1. はじめに

昭和53年東京都に於いて、「精神薄弱者生活寮制度」の発足以降、寮数、居住者数は年々増加し、平成8年の東京都内の生活寮の設置数は112寮、居住者数572人であったのが、平成13年1月1日現在の設置数は174寮、定員832人になっている。

平成13年1月31日には、東京都知的障害者生活寮運営要綱が改正され、運営主体にNPO法人が加わり、知的障害者の多様な暮らし方を支援できるようになった。東京都の福祉改革推進プランによると、平成16年度末には1,815人分の生活寮（以下：グループホーム）を目標としており、その需要は依然高い。

2. 研究の目的

本稿は、「知的障害者のグループホームに関する研究」の第3稿であり、前稿^{1) 2)}に引き続くものである。

前稿では、東京都が管理委託し、東京都知的障害者育成会の生活支援を受けている東京都城南地区、多摩地区のグループホームを対象とし、第1稿では、2地区の寮生の生活実態と生活時間の関係の側面から地区による就労形態の差異、諸室面積と平面構成・居住形態及び住環境評価の関係性を明らかにした。第2稿では、LDK空間における生活・余暇時間量及び活動に視座を置き、住環境と共用空間における居住者の生活・余暇時間量及び活動内容により、グル

ープホームの特性と問題点を明らかにした。

本稿では、新たに調査を行った、城東地区、城北地区を加えた4地区における、寮生・世話人の生活実態と居住形態・平面構成・LDK形態別に分類し、共用空間と個室空間の一人当たりの面積と生活・余暇時間量が寮生・世話人の住環境評価とどの様に相関しているかについて分析し、グループホームの現状の把握を行うと共に、今後のあり方を探っていくことを目的としている。

3. 調査の概要

平成7年8月・平成8年8月に東京都大田区、平成9年7月・平成10年3月に東京都品川区・多摩地区、平成11年7月に東京都城東地区、平成12年6月に東京都城北地区のグループホームに対して、グループホームの実態を考察・分析するために、①留置回収方式及びヒアリングによる寮生・世話人に対するアンケート調査（アンケートは基本的に寮生本人が回答を行うが、困難な場合は世話人の協力を得て回答）②共用空間に対する実測調査、③世話人に対するヒアリング調査を実施した。

なお、調査対象者数は城南地区で寮生92人・世話人25人、多摩地区で寮生86人・世話人24人、城東地区で寮生97人・世話人7人、城北地区で寮生100人・世話人27人であり、全寮数84寮・寮生375人・世話人103人である。

* 日本大学生産工学部建築工学科 教授・博士(工学)

** 日本大学大学院生産工学研究科建築工学専攻 大学院生

*** ㈱佐藤総合計画 修士(工学)

**** ㈱協立建築設計事務所 修士(工学)

***** ㈱アイテック計画 修士(工学)

Prof., Dept. of Architecture, College of Industrial Technology, Nihon Univ., Dr. Eng.

Graduate Student, Dept. of Architecture, College of Industrial Technology, Nihon Univ.

Axs Satow Inc., M. Eng.

Kyoritsu Architecture, M. Eng.

Itec Planning, M. Eng.

表-1 調査対象施設の経緯と施設形態による分類結果

地区	所在地	名称	用途	1. 経緯				2. 施設形態				3. 建築面積 (㎡)				4. 構造				5. 設備				6. 備考				7. 調査結果				8. 評価			
				緯度	経度	高さ	幅	長さ	面積	容積	高さ	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	容積	
A	大田区	A1	住宅	4	4	8	[8]	2	0	2	4	1	1	0	0	0	4	4																	
	大田区	B1	住宅	4	0	4	[4]	1	0	2	2	0	0	0	0	0	2	2																	
	大田区	C1	住宅	2	2	4	[4]	1	0	0	3	0	1	0	0	0	0	4																	
	大田区	D1	住宅	5	2	7	[8]	2	1	1	4	1	0	0	0	0	5	2																	
	大田区	E1	住宅	1	1	2	[4]	1	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1																	
	大田区	F1	住宅	4	0	4	[4]	1	2	1	1	0	0	0	0	1	1	2																	
	大田区	G1	住宅	4	3	7	[8]	2	5	0	2	0	0	0	0	0	1	6																	
	大田区	H1	住宅	0	4	4	[4]	1	1	3	0	0	0	0	0	0	2	2																	
	大田区	I1	住宅	4	0	4	[4]	1	4	0	0	0	0	0	0	0	1	3																	
	大田区	J1	住宅	0	4	4	[4]	1	4	0	0	0	0	0	0	0	1	3																	
B	大田区	K1	住宅	3	1	4	[4]	1	0	0	3	0	1	0	0	0	0	4																	
	大田区	L1	住宅	0	4	4	[4]	1	3	1	0	0	0	0	0	0	1	0	3																
	大田区	M1	住宅	4	0	4	[4]	1	3	0	1	0	0	0	0	0	1	3																	
	大田区	N1	住宅	3	1	4	[4]	1	1	2	1	0	0	0	0	0	2	2																	
	大田区	O1	住宅	4	0	4	[4]	1	0	2	2	0	0	0	0	0	1	3																	
	大田区	P1	住宅	6	2	8	[8]	2	5	1	0	0	0	2	0	0	2	6																	
	品川区	Q1	住宅	9	3	12	[16]	4	2	0	5	2	2	1	0	0	4	8																	
	品川区	R1	住宅	4	0	4	[4]	1	1	3	0	0	0	0	0	0	1	3																	
	品川区	S1	住宅	5	2	7	[8]	2	0	0	2	2	1	0	0	0	3	4																	
	品川区	T1	住宅	2	2	4	[4]	1	2	1	1	0	0	0	0	0	1	3																	
C	品川区	U1	住宅	1	5	6	[8]	2	1	1	4	0	0	0	0	0	0	6																	
	品川区	V1	住宅	4	0	4	[4]	1	1	3	0	0	0	0	0	0	1	3																	
	品川区	W1	住宅	2	1	3	[4]	1	3	0	0	0	0	0	0	0	2	1																	
	品川区	X1	住宅	0	4	4	[4]	1	0	1	2	1	0	0	0	0	0	4																	
	品川区	Y1	住宅	2	1	3	[4]	1	0	0	2	0	0	1	0	0	2	1																	
	品川区	Z1	住宅	0	4	4	[4]	1	0	1	2	1	0	0	0	0	0	4																	
	品川区	AA1	住宅	4	0	4	[4]	1	2	1	1	0	0	0	0	0	2	2																	
	品川区	AB1	住宅	4	0	4	[4]	1	1	3	0	0	0	0	0	0	1	3																	
	品川区	AC1	住宅	4	0	4	[4]	1	3	0	0	0	0	0	0	0	2	2																	
	品川区	AD1	住宅	2	1	3	[4]	1	3	0	0	0	0	0	0	0	2	1																	
D	品川区	AE1	住宅	1	3	4	[4]	1	2	0	0	1	1	0	0	0	1	2																	
	品川区	AF1	住宅	4	0	4	[4]	1	1	3	0	0	0	0	0	0	0	4																	
	品川区	AG1	住宅	4	0	4	[4]	1	3	0	0	0	0	0	0	0	2	2																	
	品川区	AH1	住宅	4	0	4	[4]	1	2	1	0	1	0	0	0	0	0	4																	
	品川区	AI1	住宅	4	0	4	[4]	1	3	0	0	0	0	0	0	0	1	3																	
	品川区	AJ1	住宅	2	2	4	[4]	1	1	2	1	0	0	0	0	0	1	3																	
	品川区	AK1	住宅	4	0	4	[4]	1	2	1	0	1	0	0	0	0	1	3																	
	品川区	AL1	住宅	4	0	4	[4]	1	2	1	0	0	0	0	0	0	1	3																	
	品川区	AM1	住宅	4	0	4	[4]	1	2	1	0	1	0	0	0	0	0	4																	
	品川区	AN1	住宅	4	0	4	[4]	1	2	1	0	1	0	0	0	0	0	1	3																
E	品川区	AO1	住宅	3	1	4	[4]	1	2	1	0	0	0	0	0	0	1	3																	
	品川区	AP1	住宅	4	0	4	[4]	1	3	0	0	0	0	0	0	0	2	2																	
	品川区	AQ1	住宅	4	0	4	[4]	1	2	1	0	1	0	0	0	0	0	4																	
	品川区	AR1	住宅	4	0	4	[4]	1	3	0	0	0	0	0	0	0	1	3																	
	品川区	AS1	住宅	4	0	4	[4]	1	2	2	0	0	0	0	0	0	0	4																	
	品川区	AT1	住宅	2	2	4	[4]	1	1	2	1	0	0	0	0	0	1	3																	
	品川区	AU1	住宅	4	0	4	[4]	1	3	0	0	0	0	0	0	0	1	3																	
	品川区	AV1	住宅	4	0	4	[4]	1	2	1	0	1	0	0	0	0	0	4																	
	品川区	AW1	住宅	4	0	4	[4]	1	2	1	0	1	0	0	0	0	0	4																	
	品川区	AX1	住宅	4	0	4	[4]	1	2	1	0	1	0	0	0	0	0	4																	
F	品川区	AY1	住宅	4	0	4	[4]	1	3	0	0	0	0	0	0	0	1	3																	
	品川区	BA1	住宅	5	2	8	[8]	2	0	3	3	1	1	0	0	0	7	1																	
	品川区	BB1	住宅	2	2	4	[4]	1	3	1	0	0	0	0	0	0	0	4																	
	品川区	BC1	住宅	2	2	4	[4]	1	2	2	0	0	0	0	0	0	0	4																	
	品川区	BD1	住宅	4	0	4	[4]	1	4	0	0	0	0	0	0	0	2	2																	
	品川区	BE1	住宅	4	0	4	[4]	1	2	1	0																								

4. グループホームにおける施設形態

東京都城南地区・多摩地区・城東地区・城北地区のグループホームに対して実測調査を行った結果、以下のように分類することができる。

4. 1. 居住形態^{注1)}

- ①同居型
- ②非同居型
- ③同居・非同居併用型
- ④寮生通い型
- ⑤寮生・寮母共に通い型

4. 2. 平面構成^{注2)}

- ①共用空間独立併用タイプ
- ②共用空間独立タイプ
- ③通路アプローチタイプ
- ④共用空間単独タイプ
- ⑤共用空間独立・通路アプローチ併用タイプ

4. 3. LDK形態^{注3)}

- ①D-K型
- ②DK型
- ③L-D-K型
- ④L-DK型
- ⑤LD-K型

5. グループホーム内における生活実態

5. 1. 年齢構成 (図-1. 2)

寮生に関して、どの地区に於いても女性より男性の割合が高い。男性では年代が高くなるにつれて人数が減少傾向にあるのに対し、

女性は20代、40代が最も多く、50代、60代は男性と同様に減少している。20代の寮生の割合は各地区ほぼ等しく、多摩地区では男性の年齢構成が20代、30代に集中しているのに対し、女性は40代の割合が高い結果になっている。

世話人に関して、女性が全体の約98%を占めており、特に多摩地区の世話人は全て女性である。年齢は50代、60代に集中しており、20代の男性、女性は共にいない。

5. 2. 寮生の居住年数と世話人の就労年数 (図-3. 4)

寮生の居住年数、世話人の就労年数共にどの地区も0~2年の割合が最も高く、年数が増すごとに人数も減少傾向にある。ここ7年間に於いて、寮数は約1.8倍、寮生は約1.7倍に増加していることが関係していると考えられる。城南地区では、「精神薄弱者生活寮制度」が発足した頃からのグループホームに於いて、20年以上生活している寮生と就労している世話人がいる。世話人の就労年数では0~10年間は減少傾向にあるが、10~14年間就労している割合は多少増加している。

5. 3. 障害の程度 (図-5)

どの地区に於いても、4度(軽度)の割合が最も多く、次いで3度(中度)の割合が高くなっており、これら2つの合計は全体の約97%であり、グループホームの寮生の大半が4度あるいは3度であることが判明した。これに対して、2度(重度)は約2%しかおらず、これはグループホームの入居者が日常生活上、身辺処理が可能であり、また就労(福祉的就労を含む)していることが原則になっていること、2度の知的障害者への対応が整っていないこと等が考えられる。城東地区に於いて、2度の割合が約6%と他の地区より高い結果になっているのは、2度の知的障害者のためのグループホームがあることに起因している。

図-1 各地区の寮生の年齢構成

図-2 各地区の世話人の年齢構成

図-3 寮生の居住年数

図-4 世話人の現在のグループホームの就労年数

6. 寮生のグループホーム内での生活状況

6-1. 分析方法

グループホームの諸室構成と寮生の生活状況との関係性を施設形態別に分類し、特に共用空間と個室空間に着目し、グループホームの面積比率、一人当たりの面積と評価、住居に関する評価と、実際に寮生がグループホーム内のどこで生活しているのかを平日と休日の共用空間・個室空間の滞在時間割合から分析し考察する。

なお、寮生、世話人の住環境に関するアンケートの回答のうち、「満足」を5点、「まあ満足」を4点、「普通」を3点、「多少不満」を2点、「不満」を1点とし、得点化したものを評価得点とする。

6-2. 居住形態による分類

地区別における居住形態（図-11）に於いて、同居型が全体の約57%を占め、非同居型は約30%であり、グループホームの居住形態の多くはこの2つに集約されていることが判明した。特徴として、城南地区のみ同居型の割合が約22%、非同居型の割合が約44%で、非同居型の割合が高くなっている。

面積比率に於いて、「LDK面積」はどの形態も20%前後であり、共用空間全体でみると、「その他の共用空間」、「廊下・階段等」の面積の差から、寮生通い型が一番低い値となっている。この形態は、「その他の共用空間」が他の形態より少ないことが特徴である。そして、「世話人室」がないこともあり、「寮生室」の割合が他より大きい結果となった。（図-12）1人当たりの面積と評価（図-13）では、1人当たりの個室面積は形態による違いがほとんど見られず、1人当たりの共用空間面積が低くなると、評価得点も低くなる傾向があると考えられる。住居に関する評価（図-14）に於いても、寮生の評価は共用空間の面積と相関関係にあることが判明した。この中でも特に、寮生・寮母共に通い型の寮生の評価が一番高く、寮生・世話人共に評価が高かったのは、同居型であった。世話人の評価は共用空間の面積との相関関係は見られず、また寮生の住居に関する評価とも差異が見られる。寮生と世話人の評価が一番近い結果となったのが寮生通い型であり、共に評価が低く、お互いに問題点を持っていると思われる。この形態は寮生に於いて最も低い評価となっている。世話人に於いて同居・非同居併用型の評価が最も低く、寮生と世話人の評価に相違点があることが判明した。

諸室滞在時間割合（図-15、16）に於いて、1人当たりの共用空間面積・個室面積との相関関係は見られなかった。平日と休日の諸室滞在時間割合を比較すると、同居型以外は個室滞在時間割合が平日より休日のほうが高くなり、逆に共用空間滞在時間割合は平日より休日の割合が低い結果となった。特に世話人と同居していない形態である非同居型、寮生通い型、寮生・寮母共に通い型では、休日の個室空間滞在時間割合が平日のそれより大きく増加している。寮生通い型に於いては、共用空間滞在時間割合が平日と休日で大きな差が見られ、この形態の寮生は世話人とのコミュニケーションを主に平日にとっており、休日は個室で過ごす傾向にある。一方で、同居型は共用空間滞在時間割合の平日と休日の差異が見られず、個室空間滞在時間割合に於いて、平日より休日が低い結果となった。これらのことから、同居型の寮生は、世話人あるいは他の寮生との外出、あるいは個人的なグループホーム外での活動が活発であると考えられ、ヒアリング調査でも裏付けられた。

図-11 地区別における居住形態の割合

図-12 居住形態の面積比率

図-13 一人当たりの面積と評価

図-14 住居に関する寮生・世話人の評価

図-15 平日における諸室滞在時間割合

図-16 休日における諸室滞在時間割合

6-3. 平面構成による分類

地区別における平面構成(図-17)に於いて、全体では共用空間独立タイプの割合が約48%と最も高く、次いで共用空間独立併用タイプの約28%、共用空間独立通路アプローチ併用タイプの約24%、通路アプローチタイプの約4%、共用空間単独タイプの約2%の順になっている。地区ごとに見ると、多摩地区と城東地区に於いて共用空間単独タイプがないことと、城東地区に於いて共用空間独立通路アプローチ併用タイプの割合が約69%と高くなっていることが特徴としてあげられる。この地区では、1つのマンションあるいはアパートに2つ以上の部屋を借り、グループホームとして多くのケースが多く、その結果1つの部屋を寮生室とグループホームの共用空間として使用することになるので、このタイプの割合が多くなっている。

平面構成の面積比率(図-18)に於いて、「LDK面積」、「その他の共用空間」、「廊下・階段等」をあわせると、どのタイプも40%前後である。その中で最も高い割合なのが共用空間単独タイプの約49%であり、特に「LDK面積」は他のどのタイプよりも高い割合である。一方で、このタイプは世話人の部屋がないので寮生室の割合も最も高い結果となっている。これらの面積比率は一人当たりの諸室面積と比例せず、一人当たりの個室面積はタイプによって差がほとんど見られず8㎡以上確保されている。一人当たりの共用空間面積では、共用空間独立タイプが最も高い値を示している反面、評価得点では最も低い値となった。逆に一人当たりの共用空間面積が低い共用空間独立併用タイプ及び共用空間単独タイプの評価得点は高くなっている。(図-19)住居に関する寮生・世話人の評価(図-20)の共用空間独立タイプでは、寮生と世話人の評価がほぼ等しい。しかし、ここで寮生では最も低い評価であり、世話人では逆に最も高い評価となっており、また寮生の評価が高い通路アプローチタイプや共用空間単独タイプでの世話人の評価は低く、寮生と世話人の評価に差異が生じていることが判明した。寮生の評価が高い共用空間単独タイプ、共用空間独立併用タイプ、通路アプローチタイプでは、共用空間と個室空間がそれぞれ独立し、プライバシーを守れるタイプな為、評価が高くなっていると考えられる。世話人の評価が高いのは、共用空間独立併用タイプと共用空間独立タイプであり、逆に低い評価となったのは通路アプローチタイプであった。これらの大きな違いは玄関の数であり、1つのグループホームに対し、1つの玄関があるタイプと、共用空間、個室空間それぞれに対し玄関があるタイプでは、寮生の様子がわかりやすい前者のほうが世話人の評価が高くなることが判明した。

平日・休日における諸室滞在時間割合(図-21, 22)では、平日の個室空間滞在時間割合が共用空間単独タイプを除き40%前後であり、休日ではどのタイプも60%前後であった。共用空間滞在時間割合では、ほとんどのタイプが平日より休日の割合が多少低くなっている。特に、通路アプローチタイプ、共用空間単独タイプは他のタイプより平日と休日の共用空間滞在時間に差が出ている。この2つのタイプに共通することは、共用空間に行くためにそこで生活する全ての寮生が一度は個室空間から玄関を出て、そして共用空間の玄関から共用空間へ入ることであり、他のタイプとはこの点で異なり、寮生は共用空間へ行きやすいほど、この空間を利用することが判明した。

図-17 地区別における平面構成の割合

図-18 平面構成の面積比率

図-19 一人当たりの面積と評価

図-20 住居に関する寮生・世話人の評価

図-21 平日における諸室滞在時間割合

図-22 休日における諸室滞在時間割合

6-4. LDK形態による分類

地区別におけるLDK形態の割合(図-23)に於いて、全体で「DK型」が最も多く約71%、次いで「L-DK型」の約12%、「D-K型」の約8%、「L-D-K型」の約5%、「LD-K」の約4%の順である。このことから、グループホームの多くは「DK型」であることが判明した。中でもこの形態の割合が最も高いのは、城東地区で約86%にも上る。この地区は「L-D-K型」がないことが特徴である。「L」(リビング)に着目すると、これを含む形態である「L-D-K型」、「L-DK型」、「LD-K型」の割合の合計が高いのは、多摩地区、城北地区、次いで城南地区、城東地区の順になっている。

LDK形態の面積比率(図-24)では、D-K型、DK型の「LDK面積」は他の「L」(リビング)がある形態よりも低い割合となった。寮生室は、L-DK型の約35%を除き、他の形態は40%を越し、L-D-K型は最も高い割合で、約47%である。逆に「世話人室」は、L-DK型が最も高い割合で約14%、最も低い割合はL-D-K型、LD-K型の約8%である。このことから寮生室の面積比率は世話人の部屋の割合に左右されることが判明した。

一人当たりの面積と評価(図-25)では、L-D-K型が1人当たりの共用空間面積、個室面積共に最も高く4.78点である。それと共に、「L」(リビング)がついているL-D-K型の評価得点も高くなっているが、L-DK型はDK型のそれよりも低くなっている。これは、L-DK型の「寮生室」の割合や一人当たりの個室面積が他の形態よりも低いことが要因と思われる。

住居に関する寮生・世話人の評価(図-26)に於いても、L-D-K型は寮生、世話人共に高い評価をしている。寮生はD-K型よりDK型、DK型よりL-D-K型というように、右肩上がりのグラフを描いているのに対し、世話人ではD-K型、L-D-K型の評価得点が低くなっている。これらのことから、寮生、世話人共に個室面積、共用空間面積が大きくなれば評価が高くなることが判り、また世話人はこの他に、形態によって差が見られ、「L」(リビング)、「D」(ダイニング)、「K」(キッチン)の各部屋が独立した形態よりも「L」、「D」、「K」のいずれかが一体となっている形態に対して評価が高くなることが判明した。諸室が一体になっていることにより、世話人は寮生に目が行き届くようになり、世話をしやすくなると考えられる。

寮生の諸室滞在時間割合(図-27、28)では、先の住居に関する寮生・世話人の評価とはさほど相関が見られなかった。共用空間滞在時間割合に於いて、平日、休日共にL-D-K型が高い割合を示しており、D-K型、DK型の休日の割合が平日より減少傾向にあるのに対し、「L」(リビング)があるL-D-K型、L-DK型、LD-K型の休日の割合は、平日のそれと比べ増加傾向にある。個室空間滞在時間割合は、平日に於いてどの形態も40%前後であるのに対し、休日ではばらつきが見られる。LD-K型以外は平日より休日の個室空間滞在時間が多いのに対し、L-D-K型は非常に低い値となっている。これは、世話人あるいは他の寮生と共に外出する等のグループホーム外の活動が活発ということや休日だけ自宅に帰る等に起因していると考えられる。

図-23 地区別におけるLDK形態の割合

図-24 LDK形態の面積比率

図-25 一人当たりの面積と評価

図-26 住居に関する寮生・世話人の評価

図-27 平日における諸室滞在時間割合

図-28 休日における諸室滞在時間割合

7. まとめ

本研究では、東京都内4地区のグループホームの寮生と世話人の基本的属性、グループホームの居住形態、平面構成、LDK形態から見る住環境、生活時間についての概略を各々相互比較を行った上で、グループホームの現状と問題点、そして今後の課題を総体的に扱ったものである。その結果を要約すると以下ようになる。

1) 寮生と世話人の年齢構成に於いて、寮生の高齢化が進んでおり、現在は就労していても、定年後の生活に問題がある。ヒアリング調査の結果から、世話人からも寮生の高齢化に対し指摘があり、高齢と知的障害を持つ者への受け皿づくりが必要であろう。さらに、寮生の高齢化と共に、世話人の高齢化も重要な問題である。世話人の仕事は食事及び日常生活に必要な世話であるが、2度(重度)の知的障害者がいる場合、日常生活に於いて介護が必要になるので肉体労働になる。一方で、一日のうちのほとんどを世話人としての仕事に費やし、平日はもちろん休日でも寮生の世話をしている方もおり、世話人の子育て等との両立は困難と思われる。従って、世話人に対する援助も今後充実させる必要があると言えよう。

2) 寮生の現在の職業では、「精神薄弱者授産事業」の割合が多く、全体を通して社会の中で知的障害者の就労の場は未だ十分でないと考えよう。地区別に見ると、交通の便、就労の有無等、立地特性によって差異がある。加えて近所づきあいに於いて、その活発なグループホームと希薄なグループホームがあることから、周辺地域のより深い知的障害者への理解と受け入れる環境が重要と言えよう。

3) グループホーム内での生活状況で、「LDK面積」、「その他の共用空間」、「廊下・階段等」を合わせた面積比率は、各形態・タイプによって大きな差異は見られず、「世話人室」の割合により「寮生室」の割合が変化する。一人当たりの個室面積は、8㎡以上各寮生に確保されており、一人当たりの共用空間面積、居住形態、平面構成、LDK形態により住居に関する評価が左右されることが判明した。

4) 居住形態の分類では、一人当たりの共用空間面積・個室面積の割合と、寮生の諸室滞在時間割合の間に相関関係は見られず、世話人、他の寮生とのコミュニケーションがとりやすい形態に於いて、寮生の活動が活発になり、寮生、世話人共に評価が高くなることが判明した。一方、寮生はプライバシーを守りやすい形態にも高い評価をしている。平面構成による分類に於いても、寮生に関して同様の傾向が見られた。世話人は、寮生へ目が行き届きやすいタイプに高い評価をしている。プライバシーを守りやすいタイプに居住している寮生の個室滞在時間割合は、他のタイプの寮生より高い傾向にある。LDK形態の分類に於いても、世話人の評価基準は同様であり、寮生に関しては、「L」(リビング)のある形態に対し評価が高くなり、休日の共用空間滞在時間割合も平日のそれより高くなる。

5) 寮生が地域の中で自立して生活していくためには他者とのコミュニケーションも必要不可欠な為、個室はプライバシーを守り、共用空間は寮生が集まりやすく、世話人や他の寮生とのコミュニケーションがよりとりやすい空間が望まれる。しかしながら、現状に於いて、グループホームの多くは、既存の建物をそのまま利用、あるいは改装しており、土地取得の困難、費用の問題等、寮生と世話人の高齢化、地域社会との関係と共に重要な課題であると言えよう。

今後は、知的障害者がグループホームに住まい続ける中で生まれる種々の問題を抽出し、更に、住まう事と就労との関係性、各グループホームの立地及び周辺環境状況と地域社会との関係性を把握し、知的障害者のグループホームを取り巻く生活空間計画に関する研究をすすめていく事を課題としている。

注

注1) 居住形態の分類(既発表文献Ⅰ)より)

- ① 同居型: 同じ家に寮生と世話人が一緒に生活する形態である。
- ② 非同居型: 世話人が寮生の暮らしている家に食事等の世話を行うために通う形態である。
- ③ 同居・非同居型: 寮生と世話人が同居している家に一部の寮生が近くの住居から通う形態である。
- ④ 寮生通い型: 近くの住居から寮生が、食事のとき等に世話人宅に隣接した共用空間に通う形態である。
- ⑤ 寮生・寮母共に通い型: 寮生は共用空間に隣接する寮生室から、世話人は近くの住居から、共に共用空間に通う形態である。

注2) 平面構成の分類(既発表文献Ⅰ)より)

- ① 共用空間独立併用タイプ: 共用空間から独立する寮生室と共用空間を一度通過して入る寮生室が併用されたタイプである。
- ② 共用空間独立タイプ: 共用空間が寮生室から独立したタイプである。
- ③ 通路アプローチタイプ: 個室と共用空間がそれぞれ独立した形になっており、外通路が各室へのアプローチとなっているタイプである。
- ④ 共用空間単独タイプ: 世話人と寮生が共に共用空間に通うタイプである。
- ⑤ 共用空間独立・通路アプローチ併用タイプ: 外通路から寮生室へアプローチするタイプに、共用空間を一度通過して入る寮生室が併用されたタイプである。

注3) LDK形態の分類(既発表文献Ⅱ)より)

- ① D-K型: 居間が無く、食事室、台所がそれぞれ独立している形態である。
- ② DK型: 居間が無く、食事室、台所が一体となっている形態である。
- ③ L-D-K型: 居間、食事室、台所がそれぞれ独立している形態である。
- ④ L-DK型: 居間が独立していて、食事室、台所が一体となっている形態である。
- ⑤ L-D-K型: 居間、食事室が一体となっており、台所が独立している形態である。

本論分に関連する既発表文献

- I) 川岸梅和、龍井慎一郎「知的障害者のグループホームに関する研究—東京都内2地区のグループホームのケーススタディ—」日本建築学会計画系論文集 第521号、p.p.203~210、1999、7
- II) 川岸梅和、新川宏人「知的障害者のグループホームに関する研究 その2—東京都内2地区のグループホームのケーススタディ—」日本建築学会計画系論文集 第539号、p.p.209~216、2001、1
- III) 川岸梅和、他「知的障害者のグループホームに関する研究その1~8」日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1分冊、1996~2000
- IV) 川岸梅和、他「知的障害者のグループホームに関する研究その1~6」第28回~第33回 日本大学生産工学部学術講演会概要集 1995~2000

参考・引用文献 (既発表文献Ⅱ)に準ずる)

- 1) 小原博之、松本啓俊、本間敏行、湯田善郎「精神薄弱者グループホームの居住形態に関する研究」日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1分冊、p.p.585~586、1991
- 2) 萩田秋雄「神奈川県における精神薄弱者の生活ホーム・グループホームに関する研究」日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1分冊、p.p.587~588、1991
- 3) 川岸梅和「知的障害者のグループホームに関する研究」REVIEW NO. 15 精神薄弱者社会復帰促進センター(1996)46~49
- 4) 宮武秀信「知的障害者のための東京都の生活寮制度とは」REVIEW NO. 2 精神薄弱者社会復帰促進センター(1992)19~21
- 5) 社会福祉法人 東京都精神薄弱者育成会 太田通勤寮「もっとすてきな明日へ 平成6年度事業概要」
- 6) 社会福祉法人 東京都精神薄弱者育成会「平成8年度 東京都手をつなぐ親の会しおり」
- 7) 手塚直樹・青山和子共著 一番ヶ瀬康子 監修「知的障害児・知的障害者の生活と援助—援助者へのアドバイス—」一橋出版、p.p.26
- 8) 厚生省児童家庭局障害福祉課編集「精神薄弱者福祉六法平成12年度中央法規出版
- 9) 西尾祐吾・濱上征士編「精神薄弱者の生活実態と福祉の現状—現場からの報告と提言—」相川書房
- 10) 東京都福祉局障害福祉部「平成7年度障害者福祉施策の概要」
- 11) 東京都福祉局「東京都知的障害者生活寮運営要綱」平成13年1月
- 12) 東京都「東京都福祉改革推進プラン」平成12年12月
- 13) 社会福祉法人 東京都知的障害者育成会「平成11年度事業報告」

(2001年6月7日原稿受理、2001年10月26日採用決定)